

# 幼児ののぞましい言語指導はどのようにすればよいか<sup>6)</sup> より

子どもの表現―「感じたこと・考えたこと」と

「ことばで表わすこと」―

大津市立大津幼稚園



動植物などの遊びにおける話しことばと

その指導事例

I 六月一日(月) 五歳児

●活動の場 テラスでかたつむりに触れながら遊んでいる

●実際の活動 (ゴチックが教師の活動)

Ki男、Ka男、S子など数名がかたつむりのまわりに集まって話している。

Ki男「つのだせ、やりだせ、頭だせ」とうたっている。

Ka男がかたつむりの殻かぢの細いのをみつつけて

「あっほそながでんでんや」

S子、かたつむりのつのと目を見つけて

「小さいほうがつので、大きいほうが目やで、目ざわると

へっこむの、S子の本にかいたった」

と言いながら目やつのにさわる。水そうのふちを指して

S子「こんなところでもわたりよるで」

教師「そんならこんな細いところでもわたるかな」と言って二

本の工作用角棒を出す。

U子、Ta男がかたつむりを手に持っているのを見て

「いやらしー」

H男「かわいいやないか」

みんなで二匹を棒の上へせて競争させる。

H男「男(大きい方に対して) がんばれ」

K子「大きいほうがんばれ、がんばれ」

「こっち(大きいほう) お母さん」

「こっち(小さいほう) こども」

全員「がんばれ、がんばれ」

T男「おーい、みてみー、おもしろいことしてるぞ」

とかたつむりで遊んでいるのをみつけて友だちをさそって集まってくる。

H男「こんどはすべり台」

とかたつむりをつまんで棒の上をすべらせる。

みんながおもしろがってわらう。

M子「でんでんむしさん、わらわはるで」

●考察

それぞれの幼児がいろいろな見方でかたつむりに接し、かたつむりに対して感じたことを思いのままの言葉で話している。教師は、「細ながでんでんや」とか「かわいいやないか」とか「かたつむりさんわらわはるで」などという個性的な表現をもっと大切に受けとめ、表現した幼児に自信をもたせるような助言をする必要があったのではないか。

II 六月十八日(月) 五歳児

●活動の場 テラスでかたつむりを見て遊んでいる。

●実際の活動

大きなかたつむりの背に小さなかたつむりがのっているのを見

て

T男「ほーら、このかたつむりお父さんやわ、上にのっとなるの」

赤ちゃんやね、かわいらしいね」

そばにN男、K男らが集まってきて見ている。

教師「T男くん、お父さんのせなかにのったことあるの?」

T男「うん、あるよ、おもしろかったわー」

教師「そう、かたつむりさんもTちゃんといっしょやね」

T男「らくちんやなー」

●考察

大きなかたつむりはお父さんで、小さいのは赤ちゃんだと感じ、自分の経験と結びつけて話している。教師の幼児の経験を聞いて正していく助言によって出てきた「らくちんやなー」ということばのなかに、T男の父親に対する親近感と信頼感のようなものが感じられる。

III 六月二十日(水) 五歳児

●活動の場 飼育しているかめを見ている

●実際の活動

水の中で手や足、首も引っ込めているかめを見ている。

Sk男「あれ、このかめさむいにゃわ、首も手も足もみんなすっ

こめとる」

教師「あらほんとやね、Sk男くん、さむそうやね、かわいそう

みたいね」

Sk男「そうや、水が多すぎる、ちょっとにしたろ」

Sk男はままごと道具のコップをとってきて水を出してやる。するとかめが首を出し手や足も出しはじめた。

Sk男「やっぱりさむかったにゃ！」

と大声でうれしそうにいう。

教師「ほんとね、きつとかめさんSk男くんありがとうって言うてるよ」

Sk男、満足そうにこつと笑う。

●考察

かめが首や手足をひっこめて水のたくさん入ったところにいるのを見て、寒いのではないだろうかとやさしい思いやりの気持ちを持って話していることばからうかがえる。また、自分なりの論理でみて考えたことを行動にうつしている。

IV 六月二十三日(土) 五歳児

●活動の場 テラスで積木を使い、かたつむりの家を作って遊んでいる。

●実際の活動

積木でかたつむりの遊び場を作り、その中にかたつむりを入れて遊んでいる。

U男「じつとしとる、とまっとる、しんどいやね」

教師「かたつむりさん、つかれたのね」

「M子ちゃんもいっしょにしてるの」

M子「赤ちゃんのおへやつくってるの」

「お花もいれてやろう」

とあじさいの花や葉をもってきて、積木で作ったへやの中に入れてやる。

教師「かたつむりさん、あじさいのお花好きなのかしら」

T子「いいにおいするしきれいやしね」

M子「かくれられるし、つかまらへんしね、よーけいれたげよ」

●考察

かたつむりと一緒に遊びながら、自分と同一化してかたつむりを見、かたつむりに対して心配してやったり、お花を使って飾ってやったりしながらやさしい気持ちを話している。

V 六月二十七日(水) 五歳児

●活動の場 かたつむりを水槽から机の上に出して遊ぶ

●実際の活動

S男、机の上においたかたつむりが、床の上に降りてきたのを見つけて

「こんなとこまでおりてきよった」

K子、自分のうでにのぼらせながら

「あーこそば、こんなとこまできよった」

「つめたいなあ、こんなぬれた」

とかたつむりの通ったあとを見ている。

M子、積木でかたつむりの家を作っている。積木のすき間からかたつむりが出てきたのを見つけて

「こんなところから出てきよる」

教師「散歩に行くのとちがう？」

M子「ここからずっと上のほうにきよるのとちがうか」

「大きいのがこんなところにいるよ」

とすみの方の積木を一つのける。

教師「そこ、玄関とちがう？」

M子「そうや、玄関やし出てきよるんやわ」

教師「殻からこわれてるのは、あんまり強くもたないようになしてあげてね」

M子、机の下の方にくっついていてるかたつむりを見つけて

「これこわれてるし、どうして家の中へ入れたる」

教師「はっぱをそばにもって行ってやったらそこへのりにくるのとちがう？」

M子は教師に言われたように葉っぱの上にかたつむりをのせて水槽の家に入れてやる。

M子、水槽のふたのかたつむりの通ったあとを見つむて

「先生、あわや」

教師「きれいやね」

S子は友だちが遊んでいるのを見て話している。

S子「でんでん虫たべる虫がいるんやで、私の本にかいたっ

た」

●考察

でんでんむしと遊んで、K子は肌で感じたことをことばとして表現しているし、M子やS子は自分の生活経験と結びつけて話している。教師は「殻からこわれている……」というようにかたつむりを物的に見たことばで助言しているが、たとえば「けがををしている……」というように幼児が身近に感じていたわりの気持ちをもちたり、想像を広げたりできるような助言が必要であった。「葉っぱをそばにもって……」という助言にも同じような

ことが言えるのではないか。

VI 六月二十八日(木) 五歳児

●活動の場 積木でかたつむりの遊び場を作って遊ぶ。

●実際の活動

男児三、四名がかたつむりの家作りをしようと集まって積木を並べている。

Mk男「これずーっと道がつづいてるにやで」

Kk男「ここかたつむりの通る道やね」

Mk男、教師のそばによってきて

「先生、きょうはかたつむりのえんそくやで、あそこが皇

子ヶ丘公園や」

と三角の積木がつんであるところを指す。

教師「そう、幼稚園のえんそくと同じところへえんそくしゃは

るんやね」

U男「先生もう道つくれたしかたつむり出してもいい？」

教師「かたつむりさんえんそくやし、うれしやるね」

かたつむりを飼育箱から出す。

Mm男「そうや、ぼくらと同じように並ばしたげよか」

Mk男「うん、ぼくこのかたつむりといっしょや先頭やで」

とかたつむりを二匹並べる。

Mm男「このかたつむりが先生やで」

と一番先に一匹出したかたつむりを指す。

Mk男「うん」とうれしそうにならずく。

半円形の積木を並べて

Mk男「これ橋にしよう、あっそうや君とこ行く道にしよう」

しばらくみんなかたつむりの歩くようすを見ている。

U男、うしろに並んでいたかたつむりが先頭を追いこすのを見

て

「おい、先生のかたつむりより先に行きよる」

Nk男「このかたつむりを先生にしようか」

と先に行ったかたつむりを指す。

「もうすぐ皇子ヶ丘公園やね」

じっと停っていると「休んどる」、積木で作った道からそれる

と「そんなところへ行つてはいけません」などみんなそれぞれに

思ったことを話している。

●考察

積木を並べているうちにMk君は皇子ヶ丘公園のイメージをもったようである。そしてえんそくさせようと話し合い、自分たちの経験と結びつけながら、かたつむりと自分たちと同じだと感じて

話している。

VII 六月二十九日(金) 五歳児

●活動の場 園庭でかたつむりのお墓作りをする。

●実際の活動

貝がらが少しつぶれて弱っていたかたつむりを赤十字のマークをつけた飼育箱に入れておいたが、死んでしまった。そのかたつむりを見つけて集まった幼児四、五名が話している。

全員、口々に「かわいそうに、かわいそうに」

U男「このかたつむりのはか作ったろ」

K男「そうや、そうや」

死んだらお墓を作ればよいと、簡単に思わせなくなかったのて「そうね、おはかね」と言いながらほかの幼児の遊びにかかわっている。

U男「はよう、おはか作ろうな」

Kt男「先生、時間なくなるよ、はよー」

教師「どこかいとところはないかな」

S男「ふまはらへんところがええわ」

みんなで園庭に出てお墓を作るのに適当な場所をさがす。

U男、はと小屋のところへ走って行って

「ここにしようか」

S男「あかん、あかん、ここかくれんぼする時かくれるし」

Mu子「あのねお花のあるところがきれいやしいいよ」

教師「どこかいとところはなかな、あのもみじの木の下はどう？」

みんなでもみじの木のところへ行く、ここがいいということだ穴を掘り、死んだかたつむりをうめてお花をかざってやる。作ったお墓のそばで小さなかたつむりを見つめる。

U男「あーっ赤ちゃんでんでん、よおーけいよる」

Kt男「あーそうや、死んだかたつむりのかわりに赤ちゃんでんでん

でんむしを神さまがくれはったんやね、E男くん」

E男、うんうんとうなずき笑っている。

Kt男「先生、そうやろ」

教師「そうやね、そうかもしれないね」

U男でんでんむしを見ながら

「もうこの赤ちゃんでんでんは死にやしたらあかんわ」

S男

E男「そうや、そうや」

Kt男

教師「こんどはだいじにしてやってね」

Kt 「でんでんむし、どこで生まれよるんやろ」

S 男 「あのな、土の中でたまご生んで、それで生まれよるんや  
で」

Kt 男 「ふうーん、それでここにいよったんやな」

#### ●考察

かたつむりの死に対して、死んでしまったらお墓を作ればよいと簡単に片付けてしまうより、もっと大切にすることを考えさせたいと思つて、教師はお墓作りに積極的でなかつたが、幼児はお墓を作るために「みんながふまないところ」とか「お花のあるところ」などと、かたつむりに対してやさしい思いやりの気持ちを発言をしている。またお墓を作つたそばで偶然に小さいかたつむりを見つけたことで、幼児も感動し今度は大事にしようという気持ちを強く持つたようである。幼児の身近にかたつむりがいたことで、新たな疑問も生まれたようである。(このあと事例十数例略)

#### 考察のまとめ

(1) 自分の経験をよみがえらせたり、結びつけたりしながらその時のイメージをことばにして話す

。大きなかたつむりの背中に小さいかたつむりがのっている

のを見て、自分が父親の背中にもせてもらった時のことに思いをはせながら話している。

。積木でかたつむりの遊び場を作つて遊んでいる過程で、積木を並べてみたら自分たちが園外保育に行った時のことが思いうかんできて、その時のイメージを結びつけながら、話している。また、自分たちの経験したことをよりたしかに言語化している。

(2) 新しく見つけた世界について不思議に思つたことを話す

。死んだかたつむりがかわいそうという気持ちから、かたつむりのお墓を作り、そこで小さなかたつむりを見つけた喜びは大きく子ども自身の心に永遠の生をたたえる共感をおこし、不思議に思つたことをことばで話している。子ども自身が死から生をみつけ出し、想像的に話しているが、つぎには「でんでんむし、どこから生まれよるにやる」と現実にはかえつた疑問を話している。このように想像の世界を現実の世界の両方に生きている幼児の特性が話しことばによく現われているように思う。

。えびがにを直接手でさわつてみたりすることにより、新しい発見をし、見つけたことを話すことにより疑問をもち、知ろうとしたり考えたりしている。

(3) 自分の気持ちを対象である小動物に託したようなことばで話す

。自分もそうだからかたつむりもそうであるという気持ちから、かたつむりに対するやさしい親しみの気持ちをことばで表現している。

(4) 考えたことやその考えを現実化したり、行動化しながら、そのことをありのままのことばで話す

。首をすっくめているかめの場合（前出）

。かめにえさを与えている時、幼児は自分とかめは同じだと感じて「水の中やないとのどがかわくにやわ」という話しことばでえさの与え方を話し、幼児が感じた通り、かめが水の中でえさを食べるのを見て、その喜びを「そうや、水の中やないとかかんにやで、水がないと泳げへんやんか」と自信をもった話しことばとして、いいあらわし、さらに音にかめが反応するのではないかという自分なりの考えを發展させ、ためしている。

。砂遊び場で山や川を作り、川を掘ったところにといをつないで水をうまく流そうとしているのであるが、水の流れ方、たまり具合などを見て考えついたことを、「こんなところにたまりよる」いくのはいくけどな、こんなところにたまりよ

る」などありのままのことばでいい表わし論理をすすめている。

#### 対談について

二月号に非常にユニークな音楽教育論を執筆して下さった服部公一氏を読者の皆さまはご記憶と思います。対談の中にも出てくるようにワン・ジエネレーションの違いをもつお二人の対談はなかなか考えさせられるものがあります。

六月十日にご自身の作品発表会を控えていらっしやる服部さんのご希望で、赤坂の服部さんの事務所を拜借してこの対談をさせていただきました。ちょっとむしむしするような夜でしたが次から次へとお話はずみ、私どもが腰をあげたのは夜の十時半でした。

帰るみちみち、「あれほど自分をさらけ出す人も珍しい。今日はいい話だった」と周郷先生はおっしゃりながら、「終電に間に合わない大変だ」とタクシーに乗って行かれました。

#### 服部公一氏略歴

一九三三年山形市に生まれる。山形東高校より学習院大学文学部に学ぶ。作曲を中田喜直氏に師事。六四年アメリカに留学し、ミシガン州立大学を中心に地域社会の音楽を研究。現在、作曲家、音楽評論家として活躍作品。ピアノ協奏曲・合唱曲集「朝の市場・童謡曲集」「おじさんの子守歌」ほか多数。